

48-1 地すべり地形の鴨川大山千枚田をたずねる (距離約 10.0km)



鴨川大山千枚田 (春)

【街歩きの概要】

大小さまざまな形をした田が段々に連なる「鴨川大山千枚田」の景観は、日本の農村の原風景をとどめており、人と自然が相互に作用して作られた文化的景観としての価値が評価され、平成 14 年に千葉県の名勝に指定された。現在では「オーナー制度」を導入し、景観保全とともに都市住民に農業体験の機会も提供するなど、地域の活性化にも貢献しているという。

安房鴨川から長狭街道を経て、東京から一番近い棚田として知られる鴨川大山千枚田（大小 375 枚ある）を訪ね、そこで野山での地図歩きを学びながら、地すべり地形にも注目して里山歩きを楽しむ。

【道順】

大山橋不動尊入り口→大山不動尊へ→大山不動尊石段・屋門・大山不動尊→→小金の庚申塚・小金大里の棚田・大里の石仏→大山千枚田→大山千枚田を眺める→大里・199 地点・大田代集会所の石仏→大田代（地すべり地形）→いさき池・元名の棚田・元名の鉱泉→北風原へ→古泉千樫歌碑・生家→熊野神社→（長狭学園）水準点→みんなみの里

【街歩き解説】

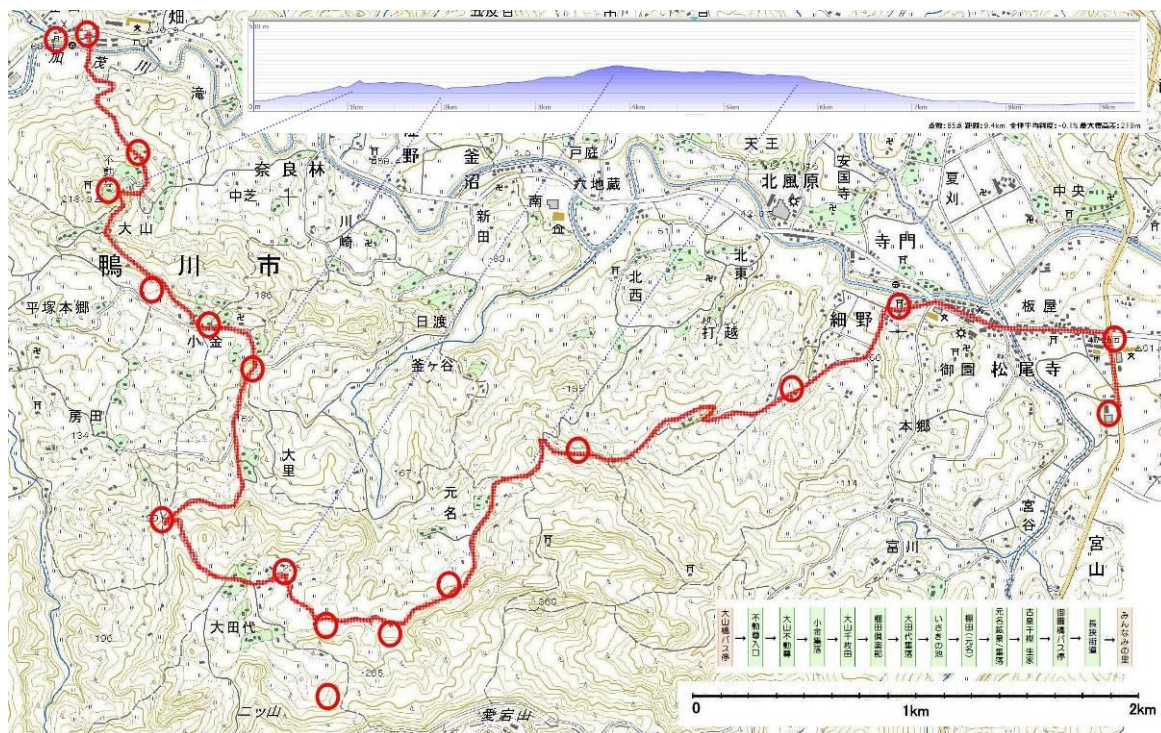
①小山歩きのための事前の準備

小山歩きをする。地図は房総旧長柄町の大山千枚田付近である。

外房線鴨川駅で、関連するパンフレットなどを入手してからバスに乗り、大山不動尊入り口バス停で下車して「大山千枚田」へ向かったのち、松尾寺集落の「みんなみの里」まで歩く。

もちろん、事前に地図や関連情報を入手し、地図にルートを書き込んで出かける。野山歩きに限らず、地図を有効に利用するためには、コピーを用意して、それに遠慮なく書き

込みをするといい。



大山千枚田（千葉県鴨川市）

1/25,000 地形図「金東」とルート断面図（yahoo! 地図で作成）



大山千枚田のガイドマップ（部分）
 （「長狭の里山散歩」鴨川日東バス）

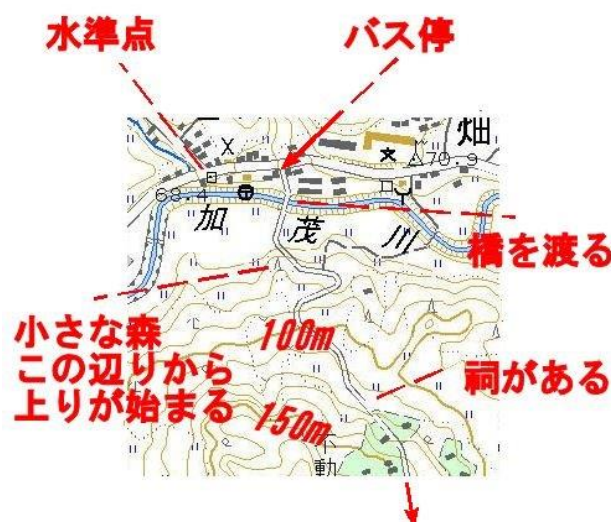
資料を基に、計画ルート決めたのち、全体の距離と比高差を把握する。延べ距離は9.3km、最大比高差が175m であることは、地図を読むことで容易にわかるだろう。これをもとに、

途中の上り下りを考慮して予定到着時間などの計画を立てるのだが、そのためには、コース全体の断面を頭に入れる必要がある。今回のコースの高低は単純で、大田代集落の「標高点・235」地点までが上り、それ以降は下りで、途中の上り下りはほとんどない。

高低がもう少し複雑になれば、全体を把握するためには、断面図を作成しなければ詳細はわからない。断面図の作成は、ネットなどにあるサービスを利用すれば簡単に対応できるだろう。

②大山橋不動尊入り口

(バス停近くのT字路を南に進む。橋を渡った1車線幅の道は、上りが始まるころに大きく曲がる。そのまま上り続けて、集落が現れるまで進む)



ルートマップ 1 (1/25,000 地形図「金束」)

準備が出来たら安房鴨川あるいは保田から鴨川日東バス、大山橋で下車する。

バス停を下りて歩きは始める前に、すぐに地図を整置(地図を地上の風景に一致させること)してみるといい。地図を見ると県道が東西に走り、目的の道は南へ分岐して、それぞれがT字形に配置されているから、バスの進行方向、あるいは東西方向を全く逆にしなければ、ここでの整置は簡単である。

地図の整置ができて、次の確認ポイントがわかったら出発だが、この先コース上には大きな集落はなく、商店はもちろん自動販売機もないことが予想されるから注意が必要だ。そのことでの、ちょっとした準備をしたら、大山橋を渡って千枚田をたずねる道歩きを始める。地図には無いが、集落が始まるあたり左手に、小さな祠とお堂が見えるはずだ。白山様と呼ばれているという。この先は、さらに上りが急になる。

地図豆知識 地図の整置

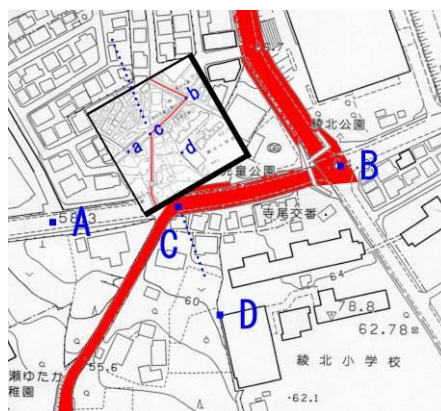
地図を広げて目標地点を目指すには、(1) 地図を地上の風景に一致させて正しく置く(「整置」)、(2) そして、地図上の目標地点方向に向かって進むことになる。

地図を整置させるためには、それ以前に「ここは(地図上の)どこか」、そして「次の目標地点は(地図上の)どこか」がわからなければならない。

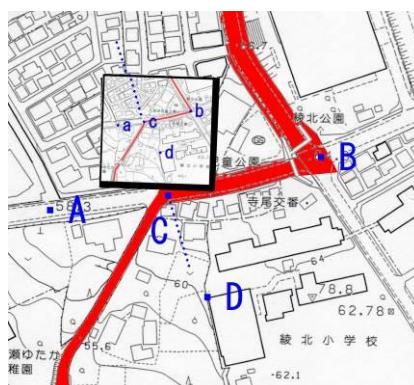
「ここはどこか」は、手がかりの少ない任意地点とするのではなく、それぞれの能力に応じた明瞭な地点で確認するといふ。街歩きなら著名な通りや交差点、公共建物の前などで、野山歩きなら道の分岐点や橋、寺社などの知られた構造物の前などで確認するといふ。現地と地図上の「ここ」の一致が出来れば、それは「地上の風景」と「地図」という二枚の地図が「ここ」という1点で串刺し状態になったということになる。

次は、地上に串刺しになった地図を回転させて、地上の風景と地図の方向を合わせて、整置を完了させる。これで、「地上の風景」と「地図」という二枚の地図が正しく重なったと考えればいい。

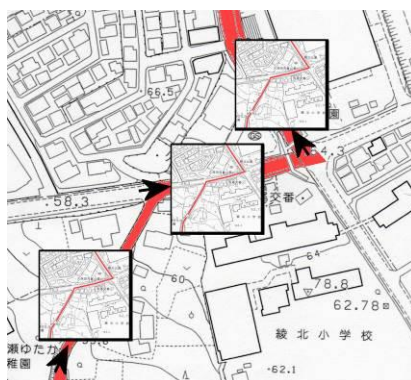
後者の操作のためには、「ここ」以外のランドマークを見つける必要がある。街中なら、辺りに見えた「××橋」や「××デパート」をランドマークとして、「ここ」を軸として「××橋」方向が一致するように地図を回転させて整置できるだろう。



C地点で地上と地図を一致させる(地図を地表に串刺しにする)



道路(C-B)というランドマークを使って、Cを軸として地図を回転させて地上と地図の方向を一致させ、Bの方向へ進む



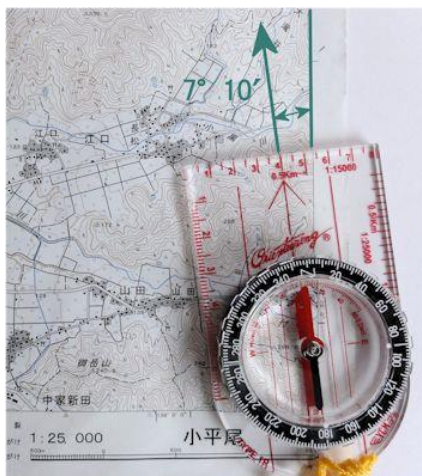
これまでの操作を繰り返して進む。
そのとき地上と地図の関係は常に一定だが、
立ち位置（矢印）と地図の関係では、地図を回して使用していることになる

では、野山歩きではどうするか。「ここ」は前述のように、道の分岐点や橋、そして小さな寺社などで特定できたとして、地図の回転に必要なランドマークが少ないから、方位磁石（コンパス）で北を知って、あるいは独立した峰などの地形を利用することで地図と実際の風景の向きを一致させる。

そのとき使用する地図は、おおむね北が上になっている。また、地図が北に対して一定の傾きをもっているときは、北を示す矢印やその量が併記されているだろう。だとしたら、付近にコンパスに影響を与える高圧送電線や変電所、工場などがいないかを確認したうえで、針が指す北方向に、地図の上方向、あるいは地図に書かれた北を示す矢印方向を一致するように回転させることで、地図と実際の風景の向きを一致させる。

これで、地図の整置はおおよそできあがる。

「おおよそ」と断ったのは、地形図なら「磁針方位は西偏約〇度」のように、含まれる範囲を代表する地点の真北に対する磁針偏差という値が記入されていて、正確には「地図は北が上になっていない」からである。ごく正確に整値させるには、この量を加味しなければならない。



正確に北方向を知るには、あらかじめ地図に磁針偏差（の量）を示す線を引いておき、

これに方位磁石の北が一致するように地図を回転させて、地図と実際の風景の向きを一致させる

また、「ここ」を特定する目標物が無い場合、方位磁石を使用しないで地図を「整置」する場合、そして一定の整値が終わったのちに山頂などを使ってこれまでの操作の正しさを点検するときには、鉄塔などを使用するほかは、「向こうに見えるあの山は、何という山だろう。それは、地図にあるどの山になるのだろうか」といった、山体などの特定が必要になる。そのためには、平面的地図から立体になった地上の風景が想像できなければならない。そこでは、どうしても等高線から立体を読む技術が必要になる。

地図豆知識： どのような場所を「確認ポイント」として進めばいいか？

街歩きの野山歩きで、常に地図を広げて歩くのは正しくない。というか、効率的、実際的ではない。選定された確認ポイントをつなぐようにして進み、その要所で地図を広げながら進むのがいい。

確認ポイントとするのは、道路の分岐点、交差点など重要な経路地はもちろんのこと、山の頂上や峠といった地形の、そして耕地から森に入る地点などの風景の大きく変わるところである。例えば、下図のAからBを経てC地点まで進む場合には、Aから次の確認ポイントまでを、「次の三差路を右に曲がる」などとして進む。

また、道行の不安を取り除くためには、ポイントまでの地形や風景を予想して書き加えることも必要になる。「最初はしだいに右へ右へと曲り、のちに左へ曲がる1車線の道を進む」とか、「道路の左手に家屋が現れるまで、1車線の道を進む」、「両側に水田のある道を進み、左手にお寺の屋根や家屋が現れてのち、ごく小さな下りになるまで進む」といったことである。

こうした途中経過を大事にしながらか、「両側に水田のある1車線の道を、左手に家屋が現れるまで進んだ先にある三差路（を右に曲がる）」(B)まで、地図を広げなくても安心して進むことができるだろう。



どのような場所を「確認ポイント」として進めばいいか？

さらに注意しなければならないのは、地図の宿命ともいえる縮小や省略、そして経年変化への対応をいかにうまくするかということだ。地図には表現されない小道や、新築された建物があるかもしれないからだ。

前者には、目の前の風景を地図の表現と同じように「2万5千分の1の目」で見る必要がある。地上のようすを取捨選択、縮小編集したかのように見て、地図と対比させるのだが、これは経験を積む以外に手はない。後者については、確認ポイントなどを変化の少ない山頂・尾根、谷、川といった地形とともに複合的にとらえる必要がある。例えば、「小さな高まりを越えた先のY字路を…」などとすれば間違いは少なくなる。

また、特徴的な地形が少なく、地図にはない十字路がいくつも登場することがある市街地などで間違いを少なくするには「右に大きく曲がった先の高等学校のある十字路を…」などとする。

本文にある（ ）書きは、こうした方法で目標地点方向に向かって進むときの、「地図読みの手がかり」を例示したものである。

③大山橋不動尊へ

(大山の集落に着いたら、左手にある石段に注意する。自動車道を進んでもいいが、この石段を直登すると迷わず大山橋不動尊にたどり着く)



ルートマップ 2 (1/25,000 地形図「金東」)

地図を広げると、バス停の標高が約60m(近くにある水準点が68.4m)で、不動尊裏の山頂が218.9m(三角点)で、この間に遮るものがないから、ここから最初の目的地である不動尊の森が見えるはずだ。

橋を渡り、1車線幅の上り道を800mほど進み、しだいに急坂になると「樹木に囲まれた居住地」記号のある「大山」集落が始まって、道は大きく右手(西)に曲がるはずである。その辺りまでは地図を広げなくても進むことができるだろう。

その後、地図をよく見ると車道から左へ少し外れたところに、不動尊へ直登する石段があるからこれを利用する。



大山不動尊

④大山不動尊

正面の小山の中腹に大山不動尊が見えて、急坂道が始まる。最初見える石段は、破損が激しいから、不安な人は車道歩きをする。大山不動尊屋門が見える辺りからは、整備された石段を上って立派な屋門をくぐると大山不動尊だ。

大山不動尊は、神奈川県の大山寺、成田山新勝寺と並ぶ関東三大不動のひとつ。木造の不動明王がある。奈良時代に良弁僧正が開山したと伝承され、境内からは長狭平野から太平洋まで一望することができる。

石段周辺に「バクチ」の木の群落がある。バクチの木は、樹皮が灰白色。絶えず古い樹皮が長さ数 10cm 程度のうろこ状に剥がれ落ち、黄赤色の幹肌を顕す。名の由来は、これを博打に負けて衣を剥がれるのにたとえたものだという。

余裕があれば、辺りの展望がてら大山不動尊裏山の三角点も見る。

不動尊を見学したら、もときた階段を下って 1 車線の道へ戻り右手に出る。ここで次のポイントを地図で確認する。

(ほぼ平坦な道を進み、大山集落が終わるころに分岐点に出る。右手は軽自動車道、左手の 1 車線の道を進むと細い尾根を横切る道となるはずだ)

⑤小金集落の分岐まで

(1 車線の道が細い尾根を横切ると、やや下りになり、小金の集落に入る。右手下からの 1 車線が合流した Y 字路を、ほぼ直進する。まもなく左手に寺院を見ながら大きくカーブすると再び Y 字路になる)



ルートマップ 3 (1/25,000 地形図「金束」)

これまでは左手に谷を見ていたが、細い尾根にある小さな峠を越えてからは、右手に谷を見るようになり、谷に向かって棚田の風景が広がる。しかし、ここはまだ大山千枚田ではない。

辺りは「小金」の集落である。峠を越えた見晴らしのいい場所に、古民家を移築したと思われるレストランがある。そして、小金集落の中ほどにある庚申塚などを見て、小金集落、大里集落の小さな棚田、大里集落の道端にある道祖神など見ながらの歩きは快適だ。左手に寺院の躰が眼に入るかもしれない。

⑥大山千枚田

(小金集落の終わりにあるY字路を右に出る。上り切った小丘が「・162」地点。同地点の先にある大里のY字路を左に上る道をすすむ)



ルートマップ 4 (1/25,000 地形図「金束」)

小金集落の終わりにあるY字路を右に進み、「・162」地点へでると、その左手下には「大山千枚田」の棚田の風景が広がる。日本棚田百選の大山千枚田には、秋にはかかしが並ぶのだという。棚田倶楽部の展望テラスからは、大小 375 枚の千枚田と山並みが眺められるから、ここで大休憩する。

その後「・162」地点の先にあるY字路へと進む、右は1車線の道(下り)、左は小型自動車道(上り)である。いずれも農道だから、それほど顕著な違いは無いかもしれない。左の小型自動車道の尾根道へと進む。



鴨川大山千枚田 (秋)

⑦ 「・199」から最高所・(大田代集会所) 石仏へ

(大里集落から道なりに進み、地図上の5差路へ出て、最も左の道を集落に入るまで進む)



ルートマップ 5 (1/25,000 地形図「金束」)

「・199 (m)」地点は、図上では 5 差路になっているが、実際は図のように微妙なずれがある。

地図は、地上の風景を縮めたものだから、このようなことは、いくらでも起こりうる。この場合は、「折り返すように左へ」とたどれば、間違えることは無い。どうしても、現場で不安になったら、このときこそコンパスを取り出す。コンパスの北と地図の上を一致させた後は、地図の縮尺を考えながら現地の交差点に注目して対処する。局所で見ると、目的の道は東に進むことになる。

さて、棚田が発達しているということは、傾斜地、そして地すべり（地形）地帯でもある。こうした地域では、教科書にある「尾根の等高線は丸みをおびて U 字形に、谷の等高線は浸食を受けて V 字形」にならない箇所が多くみられて、等高線の曲率だけで判断すると、尾根と谷を見誤る。標高数値などを基にして等高線数値を書き入れてみるといい。

大里集落から「・199 (m)」を経て大田代集落までは、ずっと上りであり、「・235」地点の手前の 250 (m) の等高線がある辺りが、このコースの最高所である。

その先、「・235」の手前にある、大田代集会所脇には石仏が並ぶ。



大田代集会所石仏

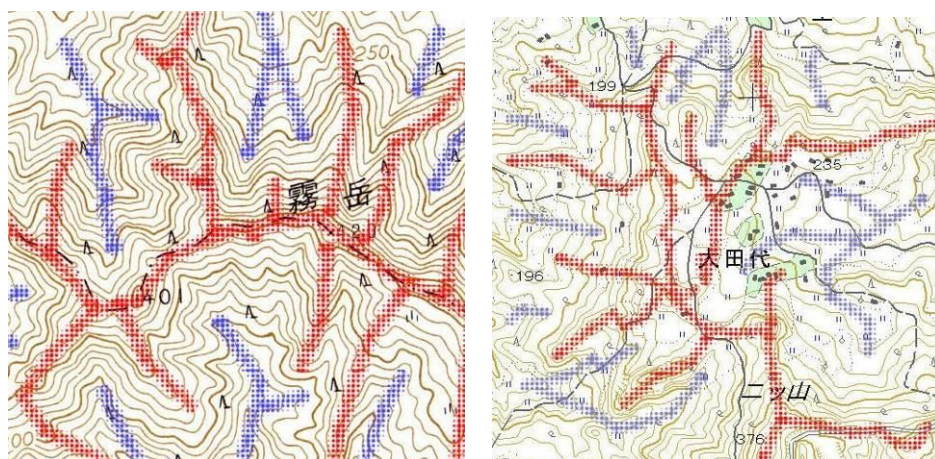
⑧大田代で地すべり地形を見る

注意深くしていれば、今回のルート近くには随所に地すべり防止区域の看板があることに気づくだろう。「千枚田」と称される棚田と「大田代」の地名、そのいずれも地すべり地形を表現している。

「田代」は、(山間地などにある)水田の適地をいう地名であり、これを利用して段々状に整地して水田等に行っているところが棚田である。

すなわち、「田代」は傾斜地や岩石地の中であって、適当な平坦地が広がり、水の供給がある場所ということになる。そこは、斜面を構成する岩石・土壌などが地下水などを起因として斜面の下方に移動する地すべり地形そのものである。

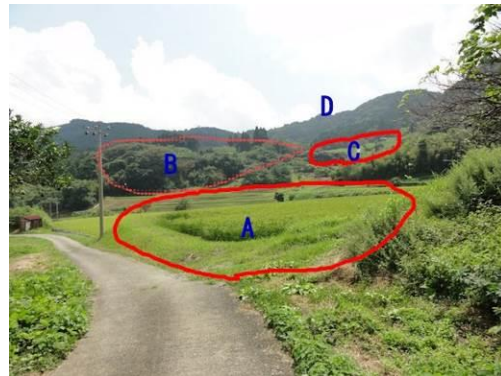
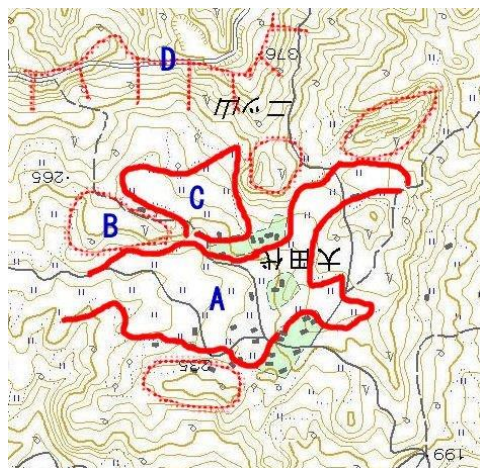
地すべり地の上部には、手ですくったような局面を持つ滑落崖があり、その下部には割れ目や凹地、湧水、崩土によって堰き止められた池、その先には小山状になった移動体があるのが特徴である。



地すべり地帯(右)などでは、谷(青)と尾根(赤)で構成される「地性線」が複雑になっていて等高線数値を注意深く読まなければ、等高線の形だけでは、どちらが高いかさえわからない。(2万5千分の1地形図「金束」)



地すべり防止区域の標識・地すべり発生時の空中写真（国土交通省 HP）



大田代の地すべり地形

滑落崖（D）、小山状になった移動体（B）、水の供給がある水田適地（A、C）
（写真と一致するように地図を回転させている）

地図豆辞典 土砂災害

土砂災害には地すべり、急傾斜地の崩壊、土石流がある。急傾斜地の崩壊は、斜面上の土砂や岩塊が安定性を失って崩落する現象で、自然現象による天災であることが主原因である。急傾斜地崩壊危険箇所等は全国で 330,156 か所ある。

地すべりは、地質的な不連続面、すなわち「すべり面」を境にして、すべり面上の地塊が移動する現象である。したがって、同じ場所で繰り返し起きることが考えられる。明確なすべり面があり、速度がゆっくりしていることが、土石崩れなどの急激な斜面崩壊との相違点である。土石流危険渓流等は全国で 11,288 か所ある。

土石流は集中豪雨を主要因として、山腹崩壊あるいは渓流の土石等が水と一体となって流下する自然現象である。地すべり危険箇所は全国で 83,863 か所ある。

地図豆辞典 地すべり

地すべり発生のメカニズムは、固い地質の上に柔らかい粘土質の地質が堆積しているといったすべり面を形成しやすい地盤があって、そこに地震による外力、豪雨・などによる地下水の浮力といった一定の条件が整うことで発生する。そして、同一地域で何度も起きるから、地すべり地形を地形図や空中写真などから判読して、地すべり発生危険箇所として把握しておくことは、防災対策を講じる上で有効である。

反復して活動する間には浸食・開析も進行するから、地図などから明らかになる地球に残される傷跡は、土砂崩れなどのように単純ではない。そこで、地すべり地形調査には、空中写真判読を活用する。

日本には被害を及ぼすおそれのあるとして国土交通大臣が指定した地すべり危険箇所だけでも、約 11,000 か所以上もあるから、これを完全に避けた土地利用をすることはできない。むしろ、うまく付き合うことが大事である。



急傾斜地（香川県 HP）



地すべり（香川県 HP）



土石流（香川県 HP）

⑨大田代から元名鉱泉へ

（大田代集落内の Y 字路を左にとって、進行方向の右が高く、左が低い、どこまでも下る道を集落が現れるまで進む）



ルートマップ 6 (1/25,000 地形図「金束」)
 (元名鉱泉の場所に温泉記号を挿入したもの)

大田代集落の先、道の右手沢の中に、ごく小さな「いさき池」がある。そして、元名集落近くにも棚田が続く、いい道筋が続く。道左端に、鉱泉水が蛇口から流れるだけの「元名の鉱泉」があって、手ですくってみると硫黄の匂いがするはずだ。いさき池はごく小さく、鉱泉も蛇口だけのことであるからか地図への記入は無い。

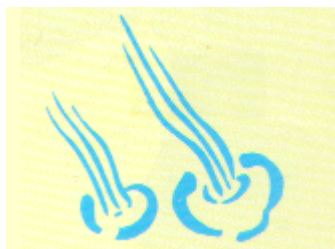


元名鉱泉

地図豆知識 地図と温泉記号

日本の地形図に地図記号が本格的に使用されるのは、国の機関が組織的に地図作成を始める明治期に入ってからのものである。そこで使われている、明治17(1884)年に決められた温泉の地図記号は、ご存じのように湯壺から沸き上がる湯けむりを連想させるものであった。この記号は、明治期に日本を訪れた外国人が賞賛した（「明治事物起源」）、あるいは1939年に来日したドイツのカールスルーエ市の温泉協会会長が世界の名記号であると絶賛したという話が残っている。

それでは、日本における温泉記号の始めはいつのことだったのだろうか？ 群馬県の磯部温泉には、元祖・温泉記号の碑がある。これは昭和56(1981)年に建てられたもので、昭和45年ごろに発見された古文書の裏にあった古文書の裏にあった裁許絵図（「上野国碓氷郡上磯部村 中野谷村就野論裁断之覚」の地図）に温泉記号が描かれていたことちなむものである。万治4年(1661)の同図の泉源の位置には、図のような温泉記号があって、日本最古のものだとか。



古地図に描かれた温泉記号

さて、明治期地図に使われている温泉の地図記号は、下図にあるように湯壺から沸き上がる湯けむりを連想させるものであったが、その後の温泉記号には、地図作成にも描きやすさという合理性が要求されて、三本湯気のゆれがなくなり、線が次第に細くなることで

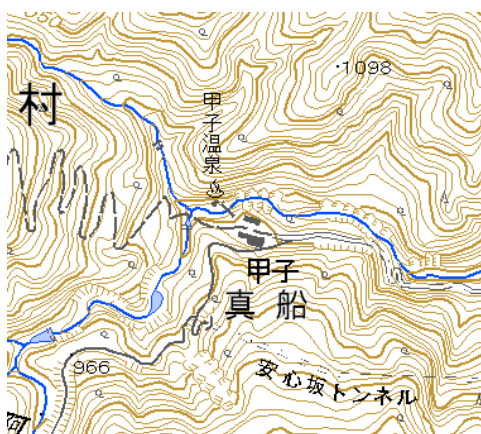
表現する湯気が消えるようすも無くなり、つい最近までは湯壺に三本の棒が立っているという状況にあった。

この変化の背景には、ペンによる清描（素図を製図すること）からスクライブ清描への技術変革がある。前者は文字どおり、研ぎ澄まされたペンとインクと紙を使用して描き、後者はスクライブベースと呼ばれる不透明膜を塗布したポリエステルベース紙をスクライバーと呼ばれる針で削り取る形で行う。この技術変化に併せて、地図作成の合理化が進み、記号の単純化が図られ、「次第に線が細くなる」といった表現が極端に少なくなった。

ところが、どういう風の吹き回しだろうか、あるとき話題になった温泉疑惑騒ぎのせいでもないだろうが、平成14年に「図式」が変更されて、湯気が少々揺れている。しかし、外国人から称賛を受けたころの面影はない。



さて、その温泉記号の表示位置は、温泉旅館の建物があるところでも、露天風呂や温泉風呂のあるところでもなく、湯気が吹き出す槽などがある泉源（井戸）のあるところが原則である。それではあまりにも不親切だから、今では、それはあくまでも「原則」として扱われるようになった。



温泉記号のあるところは？（「甲子山」）

⑩元名から北風原へ

（元名の集落を抜け、小さな峠からヘアピンカーブへと進み、その先の交差点で右へ曲がる。その後は、次のヘアピンカーブが現れるまで軽自動車道に沿って進む）



ルートマップ 7 (1/25,000 地形図「金東」)

最初のヘアピンカーブの先を「北風原（ならいはら）」と呼び、いかにも清々しい風が通り抜けそうな地名である。じっさい、夏でも涼しい風が流れる林の中を進む。

ちなみに、地方によって東風（こち・ひがし）・西風（ならい・にし）・南風（はえ・みなみ）・北風（あなじ・ならい・きた）等と呼ぶ。ただし、東日本では「西風」を「ならい」と呼ぶことが多く、地方によっては「北風」「北西風」のことも「ならい」と呼ぶ。

⑪北風原から熊野神社へ

（ヘアピンカーブを二つ曲り、その後の二つのY字交差点では右へ、右へと進む。次のやや平坦になった「・66」の交差点では左へ曲がる。突き当たりが熊野神社だ）



ルートマップ 8 (1/25,000 地形図「金東」)

ヘアピンカーブから先は、ほぼ道なりに進む。道はずっと下りだ。左、右の住宅の先には古泉千樫歌碑・生家がある。

そこには、伊藤左千夫門人だったという歌人古泉千樫の「みんなみの嶺岡山の焼くる火のこよひも赤く見えにけるかも」の歌碑と生家があるから立ち寄ってみる。

⑫みんなみの里へ

(熊野神社から長狭街道に出て東へ進み、病院と学校のある交差点を右手(南)へ進み、「みんなみの里」で終わる)



ルートマップ 9 (1/25,000 地形図「金東」)

熊野神社からバスが通る長狭街道に出て東へと進む。車を避けるため、そして町並みを見るためには少しでも旧道をたどるといい。時間があれば、長狭学園敷地内に水準点を探してみる。松尾寺集落東の十字路を右に折れて、国道わきにある「みんなみの里」で終わる

ります。

みんなみの里は、郷土料理や農産物を販売する道の駅だ。名称は、寄り道した古泉千樫の歌から命名した。施設内には、地場産品や伝統工芸品などを展示・販売している「交流館」や、田植え・稲刈りやイチゴ狩り、陶芸などが体験できる「体験館」などがある。

ここから、保田、安房鴨川あるいは木更津行のバスに乗車して帰途につく。

さて、今回のようなコースでは、随所に集落があり、道の分岐が多い前半に注意が必要であるがわからない時は人に訊ねればよい。反して、後半は主に分岐の少ない1車線の道をたどるから、迷うことは少ないのだが、集落がないことで迷ったときに人に訊ねることができないだろう。

そうした心構えが必要になる。また、この程度の里山歩きで、しかも自動車道を利用したものなら、コンパスなどを用意するよりは、事前の地図読みをしっかりとすべきである。このコースでは、もしも道に迷っても「けっして、徒歩道路に入らない」こと。もしも迷ったら、「自動車道路を進行方向の左手へ、あるいは谷の方へ下りると必ず県道に出る」ことを頭に入れておけばいい。



みんなみの里

****+ オフィス 地図豆 yamaoka mitsuharu ****+